

氏名 よし しば み き 教授



主な研究テーマ

- 1) LTD (Learning Through Discussion) 話し合い学習法について
- 2) ICTを活用した語学教育

令和元年度の研究内容とその成果

1) 大学や学校における教育の中心的活動は授業です。授業が変われば学生が変わり、大学や学校が変わると言われます。それだけに教員にとってはどのような考え方や技法を用いて授業を計画し実践するかが大きな課題と言えます。協同学習に基づくLTD (Learning Through Discussion: 話し合い学習法) は、文章読解における実践的な学習法で、論理的な思考力や言語技術の育成、コミュニケーション力や対話力の向上、チームワーク能力の育成に効果的だと言われています。近年その有効性と汎用性の高さが認められ、大学等の初年次教育を中心に、教育内容の専門性を超えて多くの授業に広がりを見せているようです。筆者は、このLTD話し合い学習法を本学の英語の授業や外国人留学生を対象とした日本語の授業で活用できないかと思い、協同学習の考え方、LTDの手順とその背後にある考え方、LTD授業のモデル等について、図書や文献、また研修会に参加して学びました。

LTDは米国の社会心理学者W. F. ヒル

博士(William F. Hill)が考案した学習法で、LTDを紹介した最初の書籍が1962年に上梓されています。その後米国で1994年に改訂版が、そして2000年に第3版が出版されています。日本では改訂版の翻訳が1996年に、そして2006年には本書の前身となる解説書が出版されています。

LTDが生まれた背景には大学教育の荒廃があったようです。ヒル博士によれば、当時の大学生は学びに対して受け身で、学習の過程よりも結果を、理解よりも記憶を重視した学習が主流を占めていました。ヒル博士は、学生たちに学ぶ喜びを体験させたいと考えLTDを考案したそうです。

LTDには、具体的な目的と理念的な目的があります。具体的な目的は、学習教材である課題文を深く読み解くことです。また、仲間との対話を通して課題文を読み解く過程で、基本的な学習スキルが獲得され、批判的な思考力や自己学習能力が育成されます。これらもLTDの具体的な目的の一つです。理念的な目的は、「真なる学びの追求」で、学生には学ぶことの楽しさや面白さを知り、学び続けることの意味とその

素晴らしさを体験してもらいたいとLTDの実践者は考えています。

LTDには主に3つ「学び合い」「課題解決優先」「LTD過程プラン」の特徴があります。

まず「学び合い」とは、小グループによる学び合いの有効性を認め、積極的に活用するという点です。グループでの積極的かつ対等な話し合いを通して、参加者一人ひとりが課題文の理解を深めます。次に、「課題解決優先」とは課題文の理解を主たる目的としたグループ活動という点です。教育場面でグループを活用する際、一つは学習課題の解決を目指した活用と、もう一つ人間関係の改善をめざした活用の2つの目的が考えられます。LTDは、課題解決を志向したグループ活動といえます。3つ目の特徴はLTD過程プランで、この過程プランにLTDの考え方や手順が凝縮されています。

このようにLTDはもともと大学生を対象に開発された技法ですが、最近の研究によれば、工夫次第で小学校高学年でも活用できることが確かめられています。また、LTDでは学習課題としてテキストを用いますが、テキストとは文章で書かれた「ひとまとまり」のものを指し、連続型テキストや「課題文」と呼ばれます。LTDで用いる課題文は、学習目的を前提に、学生の興味関心や言語能力、LTDの習熟度などを考慮して適切な課題文を準備します。学習者がLTDに慣れていない段階では、著者の主張が明確なほど、過程プランに沿っ

た学習がスムーズに展開するそうです。

これからの研究の展望

1) 昨年度はLTD話し合い学習法について、大学英語教育学会九州沖縄支部の秋季学術講演会で久留米大学の安永悟氏にご講演頂き、短い時間ながら理論と実践を学ぶことができました。その後、日本協同教育学会でLTDの実践について学べることを知り、1月末には研修会に参加する予定でしたが、あいにく新型コロナの影響で研修会は中止となりました。まだ授業で実際にLTDを活用できるまでには理論も実践も不十分ですので、今後も研鑽を積んでいきたいと思えます。

2) ICTを活用した語学教育

本学学生が入学時から持つタブレット等ICTを活用した英語や日本語の指導法を探っています。昨秋は、これまでの研究成果をもとに科学研究費補助金の基盤研究(C)に「体育大生のICTを活用した英語発信力育成プログラムの構築」という研究課題で応募し採択されました。今後3年間にわたり、学生が英語で情報発信するためのICTの様々な利用方法について、調査・研究していく予定です。